

『^{ねんじゅうぎようじえまき}年中行事絵巻』 1 巻 江戸末期？作 (立教大学図書館所蔵)

※解説は『日本絵巻大成』第 8 巻 (中央公論社 1977)を参考にしました。

「年中行事絵巻」(ねんじゅうぎようじえまき)

「年中行事絵巻」は、後白河院 (1127–1192) の下命によって作られ、もとは 60 巻の巻物にまとめられていた、と言われている。しかし原本は近世初期のころに惜しくも炎上してしまった。その後住吉如慶 (1599-1670)・具慶 (1631–1705) 父子によって写された模本 16 巻などが現在に伝えられている。「年中行事絵巻」はもともと、一月から十二月までの宮廷主要行事のすべてを絵画にしたものであった。しかし現存の絵巻では七～九月、十二月はほとんど残っていない。立教大学図書館所蔵の絵巻は江戸末期作のものと思われ、第一巻の「^{ちょうきんぎようこう}朝覲行幸」だけが描かれている。

朝覲行幸 (ちょうきんぎようこう)

「覲」は、謁見の意味。年の初めに、天皇が父帝、または母後の宮に行幸して、拝賀する儀式。宮廷の新年の年中行事は、一日に四方拝、朝賀、元日節会 (がんじつのせちえ) などが行われ、ついで二日に、二宮大饗 (にぐうのたいきょう)、朝覲行幸などが行われた。



①平安京内裏（だいら）の正殿。女官を左右に従えた天皇が立っている。その右には摂政らしき人物が座っている。赤い狩衣姿の者たちが鳳輦（ほうれん、金銅の鳳凰を付けた輿）をかついで迎えに来た場面である。



②建礼門。衛門府（えもんぶ、皇居諸門の護衛を司る役所）の守備所。右手には右衛門督（うえもんのかみ）以下がたむろしている。左手、門前の騎馬の群れは左衛門督（さえもんのかみ）の一行。前陣に加わるべく、五位以上が馬にまたがっている。



③馬に乗った束帯姿の若い武官が左衛門督で、陣の指揮を取っている。大きな樹の下では、銀面をあて赤い馬具で飾り立てて威儀を尽くした馬を進めている。